

ギリガンの「ケアの倫理」はいかなる普遍性を持つのか ——徳倫理学、ローティの「連帯」との対比をもとに——

長 友 敬 一

0、はじめに

キャロル・ギリガン（Carol Gilligan 1937-）の提起した「ケアの倫理」は、「人間の倫理」としての普遍性を持つとされている¹。本論は、その主張について、感情を倫理の基本に置く点で「徳倫理学」との対比で、また、「共感（empathy）」を中核に据える点で、一人一人の同情やシンパシーに依拠するリチャード・ローティの「連帯（solidarity）」との対比で検討をおこなっていくものである。

近代から現代にいたる倫理思想、すなわち、義務論、功利主義、リベラリズム、リバタリアニズムなどは、概ね以下の主張をおこなっている。

- （1）倫理は理性的なものであり、理性と対比される感情や欲求は排除される。
- （2）倫理には法則性があり、倫理原則として法則化・コード化できる。

しかしながら、これらの点については疑問が生じる。（1）については、理性、感情、欲求は調和しうるものであり、むしろ倫理の基本には愛情や友愛といった感情的なものがあるという可能性がある。また、（2）については、倫理は「ひとのあり方」の問題であって、法則化・コード化できない可能性がある。

この可能性に関係するのが、一つはギリガンの「ケアの倫理」であり、もう一つが、古代ギリシアに発し中世で受け継がれながらも近現代で中断し、現在再び注目を浴びている「徳倫理学」、そしてさらにもう一つが、リチャード・ローティの「連帯」であると思われる。本論文では、その検証のために以下の順で考察をおこなっていく。

- 1、ギリガンの「ケアの倫理」の概観
- 2、徳倫理学の概観
- 3、「連帯」：ローティの方法
- 4、残された問題点

さて、本論に入る前に、ホフスタッター (Douglas Richard Hofstadter 1945-) が『メタマジック・ゲーム』で述べた、次のクイズについて考えていただきたい。

野球場へ向かう途中、父と子の乗ったクルマが線路にはまってエンストしてしまった。遠くで列車の警笛が鳴る。父は気も狂わんばかりにしてエンジンをかけようとしたが、こういう恐怖状態ではキーを回すことすらできない。とうとうこのクルマは、突進してきた列車にはねられてしまった。救急車が現場に急行し、彼らを病院に運んだ。しかし、父は途中で息絶えた。息子はまだ生きていたが、危篤状態にあり、緊急手術が必要だった。息子は病院に着くやいなや、手術室に運びこまれた。場数を踏んだ外科医が、準備を終えて入ってきた。しかし、少年の顔を見るや真っ青になり、「手術は無理です、これは私の息子です……」とつぶやいた²。

義理の息子でも、もう一人子どもが乗っていたわけでも、外科医が嘘をついたわけでも、亡くなった父親の霊魂がのりうつったわけでもない。こんなことがあるだろうか？

この問題の答えは、「外科医は母親だった」というものである。これは一つには、ジェンダーの問題である。熟練した外科医と言うと、多くの人は最初から男だと決めてかかる。しかし、それは社会的な制度や慣習や教育でそう思い込んでるだけで、実態は多様な可能性をはらんでいる。「男は男らしく、女は女らしく」という考え方が、女性の立場も、そして男性の立場も制約していると言える。も

う一つは、先入観・固定観念の問題である。私たちの暮らしている社会的環境によって、どのような先入観が根付いているのか、の問題なのだ。

さて、社会的な男女の棲み分けは、マンガ雑誌にも現れているかもしれない。『少年ジャンプ』で売れ筋のマンガは、ヒーローが正義を背負って冒険や戦いを経て、成長して一本立ちしていく話が多い。他方、『ちゃお』などの少女誌では、登場人物の細やかな交流がメインになっているようである。また、NHKの日曜夜8時の大河ドラマでは、多くの場合、男性が主人公で、公正さと野望の狭間で悩む栄枯盛衰の大きな流れが描かれている。他方、NHKの朝の連続ドラマでは、ヒロインが周囲の人々との交わりの中で自分を確かめていくケースが多いようである。

1、「ケアの倫理」

ギリガンは、英文学から臨床心理学の研究に進んだ。公民権運動や解放運動が盛んな状況で、ベトナム反戦運動に関わる³。のちに、発達心理学の研究に携わった。フェミニズム運動との関連で⁴、家父長制（patriarchy）の社会構造批判を行ない⁵、フェミニスト心理学⁶の観点による「中絶の意思決定に関する研究」⁷「権利と責任に関する研究」を『もうひとつの声で』（1982）で発表した。

そこで問われているものは、男性を人間の規範とする社会での個々のアイデンティティ⁸である。たとえば、女性の居場所は、育て、ケアし、補助する者として位置づけられ、心理発達の外かつ経済的評価の外に置かれている。もちろん、男性の居場所も考察される。

代表作である『もうひとつの声で』（1982）ならびに『抵抗への参加』（2011）で提示された「ケアの倫理」で彼女が言いたかったことは、今述べたような男女の区分が存在しているように見えること、そして、その区分は社会的に作られたものであって、実際は男女の区別なくどちらも重視すべき「ケアの倫理」があるということである。『もうひとつの声で』には、以下のような話がある。

薬を買う余裕がない場合、妻の命を救うために盗むべきか。

この板挟みの問いである「ハインツのジレンマ」⁹に、11歳の少年ジェイクは「盗むべきだ」と答えた。彼は、論理的・数学的に解決できる生命と財産の葛藤ととらえ、人命はお金よりも尊いと、価値の階層構造で考えたのである。

同年齢の少女エイミーは、人間は一人で生きているのではなく、世界は人間の関係性・ネットワークで成り立っているものと捉え、薬屋の主人はなぜ同情しないのか、刑務所に入れば妻の病気が重くなって妻を失うかもしれない、などと思いを巡らし、他人からお金を借りるとかローンにするなど、人間関係の破綻しない形で、交渉によって解決すべきだと考えた。

また、「自分自身に対する責任と他人に対する責任が葛藤を起こすとき、どのように選択すべきか」という問いには、ジェイクは、他人に対して四分の一、自分に対して四分の三の責任をとればよい、と数学的に考えた。一方エイミーは、どんな人なのか、その人を自分がどう思っているかにより、人々の要求に応える必要性に焦点をあて、みんなをより幸せにする方法を求めた¹⁰。

この書物で彼女はまず、他者からの分離を通して特徴付けられ、欠点がないという抽象的理想に照らして測定される自己という「男性的な考え」と、他者との結びつきを通して特徴付けられ、思いやりという行動を通して評価される自己という「女性的な考え」を対比した。

後者の女性的な観点は、従来、未発達な道徳性の問題として捉えられてきた(先のエイミーの答は、今までの道徳発達理論のテストでは、低い点数になるかもしれない)¹¹。

しかしながら、ギリガンはそれを、平等と相互関係の論理に結びついた従来の男性的な「正義の倫理」に対する、もうひとつの声である、「ケアの倫理」として新たに位置づけている。彼女が女性と面接を行う中で得たことは、女性の道徳的命令は、誰もが認める苦悩を見分け緩和するという責任に関わった、思いやりを示すという命令である。他方、男性の道徳的命令は、他人の権利を尊重し、そ

れによって生命と自己達成の権利を干渉から守る命令である。

このことは、女性が自己の世界を語るとき、自己と他者の相互依存といった愛着を示す動詞を用いるのに対して、男性が自己の世界を語るときは、分離の形容詞を用いることによって示されている。後者は権利の倫理によって正当化され、前者は心配りの倫理によって支持される。

そこで、二つの立場をまとめると以下のようになる¹²。

「正義の倫理 (an ethic of justice)」(決断に価値が見出される)

「誰もが平等に、自己と他者が同等の価値をもつ存在として扱われ、力の違いに関わらず物事が公正に進むという理想像」＝「公正さ・普遍的価値による順位付けの倫理」

「ケアの倫理 (an ethic of care)」(熟考に価値が見出される)

「誰もが他者から応えてもらえ、受け入れられ取り残されたり傷つけられる者は誰一人として存在しないという理想像」＝「具体的人間関係の異なる他者への責任重視の倫理」

ギリガンが『もうひとつの声』で提示した「ケアの倫理」では、従来の義務論や功利主義ではメインに扱われてこなかった愛、感情移入、傷つきやすさ、同情などに耳が傾けられ、倫理の世界の根本的な見直しがはかられている。「ケアの倫理」は男女の区別があるのではなく、「人間の倫理」としての普遍性を持つものとして語られる¹³。

従来の「正義の倫理」や道徳性の発達理論には、「もうひとつの声」を表明するためのロジックや語彙がないように思われる。すなわち、正義とケアは、異なる倫理・異なるパースペクティブを有している可能性がある。そして、「正義の倫理」と「ケアの倫理」は、各々のパースペクティブを補い融合するようである。

例:中絶問題¹⁴

正義＝胎児の権利と女性の権利のいずれが優先されるか

ケア＝自分と胎児が唯一の直接的な関係であるという前提で、女性・胎児・その他の人々のつながりの維持と切断のいずれがより責任ある行為か、どのような仕方が誰も傷つけないことになるか

なお、ギリガンが「ケアの倫理」に対比されるものとして挙げている「正義の倫理」は、近代の義務論（カント）や功利主義（ベンサム・ミル）、自由主義の「正義論」（ロールズ、ノージック）が念頭に置かれているように思われる。

そこで、次の問題はどうか？

あなたの家族が二人乗ったボートとまったくの他人が三人乗ったボートが、突然の突風で沖に流されそうになった。すぐにロープを投げればボートは波に飲み込まれないで助かる場合、どちらのボートの救助を優先するだろうか。

義務論では、「人格は平等に扱わなければならない」から、家族を優先することはできない。功利主義では、「全体の幸福の最大化」を目指すべきであるから、二人の家族よりは三人の他人を救わねばならない。しかし、われわれは家族を先に救いたいのが人情であり、また、他人を優先した場合、「家族を後回しにするなんて、愛情がないのか」と非難されることもあるかもしれない。こうしたケースには、「一般的なルール」といったものに納まらない愛情などの要素が入ってきている可能性がある。

2、徳倫理学¹⁵

従来、「愛情」などの「感情」や「情動」は、「欲求」とともに、「理性」に対立するものと考えられてきた。しかし、ギリガンもしばしば引用しているダマシ

オ (Antonio R. Damasio 1944-) は、理性と情動は神経システムの上では独立していない、という神経科学的な研究の成果を提示している。また彼は、情動の欠如によって合理性が損なわれるという多数の臨床事例も提示している。それらの科学的な事実を踏まえて、動物や人間の赤ちゃんの生得的な（生まれつき持っている）初期の情動である「一次の情動」(primary emotions) と、認知的状態と身体状態が結びついて、経験にもとづいた意図的な熟考を伴う情動である「二次の情動」(secondary emotions) とを区別している¹⁶。

プラトン (Plato B.C.427-B.C.347) が述べる「パトス」は、非理性的な「受動」の状態であって、コントロールの主体がまだ私の側にないものとしての「衝動」であり、ダマシオの「一次の情動」に対応する（「衝動」とは文字通り「自分の外部から衝（つ）き動かされる」という意味である）。他方、プラトンは、「高貴な怒り」や「美しいものを歎び醜いものを憎む」という情動や欲求のあり方にも言及している。これらは、「二次の情動」に対応する。彼が人のあり方に関わると考えているこうした情動や欲求は、われわれの経験や思考、ノモス（法）やロゴス、恥の意識などのネットワークと密接に絡み合っている、上位の感情・欲求である。それは理性と調和して、「適切な仕方」で欲求し、怒り、恐れることを可能にする。「徳」は、以上のような心の把握によってとらえられる。

プラトンの弟子アリストテレス (Aristotle B.C.384-B.C.322) もまた「理性と欲求の調和」を考えていた。彼は「友愛」(フィリア)の問題に『ニコマコス倫理学』十巻のうちの二巻分ものスペース、「正義」に割く以上の部分を割り当てて論じている。彼は「友愛はわれわれの人生に最も必要なものである」とし、友愛が国家共同体を結びつけていることを述べている。最大の正義は友愛に満ちたものである、とも述べられている。

徳倫理学は、義務論や功利主義とは違って、道徳に「法則」をたてたり「コード化」したりすることを疑問視している。欲求や情動や個性の問題もその射程に入れた「善い人」に焦点を当て、どのようにすれば「善い人」が達成されるのかを考察している。

徳倫理学は中世のトマス・アクィナスなどに受け継がれたが、近代になって、義務論と功利主義の影に隠れてしまった。それを二十世紀中盤以降の現代に復活させたのが、アンスコム (G. E. M. Anscombe: 1919-2001) である。彼女は「現代の道德哲学」で、「義務論も功利主義も、道德的な善さを道德法則に一致した『行為の正しさ』であると捉えているが、倫理学で大切なのは、アリストテレスが探求した、幸福で生き甲斐のある「善い生」を送ることであり、それは「徳」によって達成される。そのためには、意図、欲求、快、行為についての新たな探求が必要となってくる」と述べている。

1970年代にはウィリアムズ (Bernard Williams: 1929-2003) が「義務論では、抽象的な人格である行為者は、他の人格に対して差別をしてはならず、道德的以外の個々人の抱える事情や人間関係は重要ではなくなる。他方、功利主義者は個々人が分離独立した存在だということを無視し、行為者を「誰でもない者」、社会全体の満足の体系の代表者とみなしている」と主張した。

そこでウィリアムズは、まず自分自身の生きていること、すなわち「一般的なルール」ではなくて「具体的な個人の生の問題」から始めるべきだと考える。自分の未来の存在の条件をなす欲求、計画、利害などの様々なプロジェクトの集合体である「基本計画 (グラウンド・プロジェクト)」によって人は自己を同定し、それは各人が異なった人柄＝性格を持ち、各人がかけがえのない存在であることや個々人の間での友情形成の源泉ともなっているのである。

植物調査で南米の町に来たあなたは、反政府的な二十人のインディオを見せしめに処刑する場面に立ち会った。指揮官は、あなたが一人を処刑すれば十九人は解放するが、それを拒めば全員処刑すると言っている。従うべきだろうか？

功利主義に沿った正しい選択は、「従う」である。しかし私たちは、そうすることに不快や不正の念を抱く。そうした感情が世界に対する私たちの道德的な同

一性の感覚 (integrity) を支えている。また、私たちには人生と結びついた計画を持っていて、自分と同一化している人物・大義・制度・キャリア・才能・危険の追求などへのコミットメントがそこには含まれている。ところが、功利主義的な計算では、そうした道徳的な思いやコミットメントは重要視されず、そのひとを本人自身の道徳的な感情や行為の源泉から疎外し、integrityを喪失させる。

徳倫理学者の中には、スロート (Michael Slote) やバイアー (Annette Baier) など、個別的な人間関係や状況、感情、動機、「共感 (empathy)」などを重視する点に「ケアの倫理」との共通点を見いだし、協同を行っている論者もいる¹⁷。

また、一般的に、法律は情念ではなく理性に基づいて作られてきた、と考えられているが、ヌスバウム (Martha C. Nussbaum 1947-) は、『感情と法』(2004) という著作の中で、時にアリストテレスに言及しつつ、法の起源として「感情」を挙げている。彼女は、「感情は評価的な判断を含み、また、評価判断に対応する感情がないと判断が矛盾なく行えない」と主張している。つまり、非合理的な感情もあるが (先のダマシオの「一次の情動」に対応)、ある種の感情は理性的な「思考」や信念に結びついており、「理に適っている」、すなわち合理的なのである (「二次の情動」に対応)。彼女は前者に、差別心と結びつく恥辱と嫌悪感を、後者には、平等の侵害や不正に対する怒り、証拠につながり留められた同情や共感などを挙げている。ここにもまた、「感情や欲求と理性との調和」という徳倫理学で論じられた問題が、新たな視点から採り上げられている。

なお、ヌスバウムは、ロールズ流のリベラリズムを、さまざまな価値観の全てを含む「重なり合う合意」を尊重する点で評価しているが、少数派や社会的弱者への感情的な抑圧が存在することも見抜き、新たな観点から問いを立てている。セン (Amartya Sen 1933-) との共同研究によってケイパビリティ・アプローチを提唱しているのも、その表れと言えよう。センは、その人がどんな状況に

あり、何ができるのか、という個々人の事情を配慮して、その人のQOLを高め、選択の自由を拡大する方向で「公平」を考えるべきだと述べていた。「公平」とは、一律に「効用」のあるものを分配することではなく、やはり、ひとりひとりへのケアの心で行うべきものなのである。

また、「倫理はコード化・法則化されず、正しい人の振舞いによってしか把握できない」ということに関して、ジョン・マクダウェル (John Henry McDowell, 1942-) がアリストテレスの解釈を以下のように述べている (下線は引用者による)。

アリストテレスが一貫して言っているように、いかに振舞うべきかについての最善の一般化でさえ、たいていの場合に当てはまるにすぎない¹⁸。

親切な人は、状況が振舞いに課してくるある種の要求に対する、信頼できる感受性 (sensitivity) を持っているのである。(中略) その感受性は一種の知覚能力だと言えよう¹⁹。

例えば、自分の友人の幸せへの関心は、ある友人が弱っており、元気づけてあげられると気付くことと一緒にあって、楽しいパーティーには行かずにその友人と話す、ということを説明し得る。(中略) 複数の関心が行為を生むかもしれないとき、いかに生きるべきかについてのある捉え方が姿を現わすのは、ある事実でなく別の事実をせり出している (salient) と見る、あるいは、そう見えるようにさせられうる、というかたちにおいてである。(中略) せり出しているという今問題になっている概念は、何かを、他の[行為をなす]すべての理由を黙らせる (silencing)、ある行為の理由として見るということかたちでしか理解できない。(中略) 成文化不可能性のテーゼにより、いかに生きるべきかについての捉え方は、目下のせり出しの知覚に含まれているような、個々の状況の識別から独立には理解できない²⁰。

このマクダウェルの解釈は、意図的行為が信念と欲求によって動機づけられるとするヒューム主義的説明から離れて、一種の認識能力（感受性、知覚能力）としての徳（傾向性、能力）に、正しい意図的な行為を帰するものである。

3、「連帯」：ローティの方法

ギリガンの『抵抗への参加』には、個々の人々のインタビューや、文学作品、映画などからの引用がなされている。そうした個別の、細部にいたる声を取りあげることこそが、哲学の正しいあり方かもしれない。

たとえば、リチャード・ローティ（Richard Rorty, 1931-2007）は、自然を正確に描いて人類共通の真理を導くという哲学の伝統を、「デカルト主義」として批判している。むしろ哲学の使命は、「自分は常識的で正しい」と思い込むのではなく、様々な考えの人々との「会話を継続させること」だと述べている。彼は公共的な社会正義は、従来の哲学による「本質の探究」ではなく、「小さな断片」すなわち「一人一人の個別の人間に対しての同情やシンパシー」を手がかりに構築される「連帯」に基づくと考えている。

要点は、私たちの連帯の感覚が最も強くなるのは、連帯がその人たちに向けて表明される人びとが「われわれの一員」と考えられるときである、ということである。この場合の「われわれ」は、人類よりも小さく、それよりもローカルなもの〔同じ共同体の仲間、同じ子を持つ母親など〕を意味する²¹。

連帯とは、伝統的な差異（種族、宗教、人種、習慣、その他の違い）を、苦痛や辱めという点での類似性と比較するならばさほど重要ではないとしいに考えていく能力、私たちとはかなり違った人びとを「われわれ」の範囲のなかに包含されるものと考えてゆく能力である。（中略）すなわち、哲学的あるいは宗教的な論考よりも、（たとえば小説やエスノグラフィ〔行動観察やインタビュー〕によって）さまざまな苦痛や辱めをそれぞれの細部に立

ち入って描くことの方が、道徳的な進歩のために近代の知識人が果たしてきた主な貢献である²²。

むしろこの考え方こそが、ギリガンの方向性に近いかもしれない。

4、残された問題点

「正義対ケアという対比」は、論点そのものがジェンダー化されている、とギリガンは考えているようである。そしてギリガンは「ケアの倫理は人間の倫理である」と述べている²³。

では、正義とケアの両者の関係はどのように考えられるべきであろうか。おおむね以下の可能性が考えられる。

- 1 正義による統合 フロイト²⁴ コールバーグ²⁵ 近現代の正義論
- 2 ケアによる統合 徳倫理学 進化人類学など²⁶ スロート
- 3 ケアと正義の併存 一般理解
- 4 ケアと正義の統合 ギリガン (相補的關係)²⁷

以上と関連して、以下の論点も重要だと思われる。

- 5 ケアによる倫理の見直し ギリガン 徳倫理学 ローティ？ スロート？
- 6 ケア倫理の普遍原理化の否定 徳倫理学 ローティ

ギリガンは、「正義の倫理」の台頭の責任を、家父長制とデカルト的二元論に帰しているようである²⁸。そこで、それらの解体あるいはそれらからの解放によって、「ケアの倫理」の問題を、フェミニズムから移行して人間全体の問題とし、新たな民主主義を形成していく戦略を採っているようである。

しかしながら、民主主義の「基盤」を支えているのは、ギリガンが「正義の倫

理」としている、カントの義務論（個人の人格や人権の尊重）、ミルの功利主義（最大多数の幸福や利益の追求）、ロールズの正義論（自由と平等の実現）、ノージックのリバタリアニズム（自由至上主義）などではないかと思われる。「民主主義」における公正や平等とギリガンはどう結びつくのであろうか、あるいは新たな方法を提供するのであろうか²⁹。

ギリガンは、「理性と感情、自己と関係性を結びつける」³⁰点では、徳倫理学に親近性があるように思われるが、他方で、徳倫理学への消極的評価³¹もみられる。また、「ケアの倫理」は、対等でない関係に軸足を置いているように思われるが、最終的には、「正義の倫理」がどのような形をとっても、そこでの対等性には子ども・女性などの不平等な立場にあり得る者にかんして、その実質的な不平等を覆い隠すような仕方では、あくまで形式的なしかたで対等なメンバーとして扱うという傾向を持っていることを根本的な対立軸に置き続ける可能性もある（例えば、家父長制を撤廃しないことなどにそれが現れている）³²。以下の記述はそれを示唆している。

ケアの倫理はフェミニストの倫理なのであって、家父長制から民主主義を解放するための歴史的な闘争をみちびく倫理なのだ³³。

それは「こどもの福祉（ウエル・ビーイング）を最優先にするという進化論的要求に根付かせる」³⁴。

「家父長制」とは「男を女からだけではなく男からも引き離し、女を善と悪に分けるような態度や価値観、道德コードや制度」である³⁵。

家父長制の解体が目指される、「民主主義を家父長制から解放する」³⁶。

しかしながら、それは「家父長制の解体にもとづく現行の民主主義の改定」という意味以上のものを示唆している可能性がある。ギリガンの「ケアの倫理」を中心において、従来の「正義の倫理」の見直しを行い、相補的に「統合」と

いう主張は、とりもなおさず、「正義」や「民主主義」の意味自体が変容する可能性もある。これは徳倫理学の方向性と共有するものがあることは否めない。ギリガンは以下のように述べている。

「人間」という枠組みを設けることそのものが、家父長制的な声の否定という作業においておそらく何かを取りこぼすことが想定されるように、何らかの区別や序列を発生させ続けるであろうということは、十分に考えられる³⁷。

「人間」という枠組みの解除は、ジェンダーの問題がまずは念頭にあるのかもしれないが、さらにわれわれの固定化された人間認識とそれに根源的にかかわる正義や民主主義の認識を見直す覚悟を求めているのかもしれない。これは方法論的には異なるにせよ、方向性としては、徳倫理学やローティと同じ方向を向いているといえよう³⁸。

注

- 1 Gilligan, Carol (2011) *Joining the Resistance*, pp.12-13, 22-23, 42-43, 『抵抗への参加』 p.15, 27, 52
- 2 ホフスタッター 『メタマジック・ゲーム』 p.142
- 3 Gilligan (2011) pp.20-21, 78-80, 『抵抗への参加』 pp.24-25, 96-99,
- 4 Gilligan (2011) p.22, 『抵抗への参加』 p.28
- 5 Gilligan (2011) pp.18-19, 22-25, 37-38, 41-43, 67, 76-77, 99, 103-105, 174, 177-178, 『抵抗への参加』 pp.23-24, 29-31, 47-48, 51-53, 82-83, 93-95, 121, 127-129, 213, 218, 238-239, なお、この「家父長制」という語が著作に登場した時期については、ギリガンは以下のように述べている。'In 1996, roughly twenty years after I first wrote about a "different voice," I wrote the word "patriarchy."' in Gilligan, Carol (2023) *In a Human Voice*, p.13
- 6 Gilligan (2011) pp.80-83, 『抵抗への参加』 pp.99-102

- 7 Gilligan (2011) pp.24-25, 176-177, 『抵抗への参加』 pp.25-26, 237、小西真理子 (2018) 「中絶における女性の倫理的葛藤と責任」 (以下、小西 2018) p.3
- 8 Gilligan (2011) pp.16-17, 23-24, 『抵抗への参加』 p.20, pp.29-30
- 9 Gilligan, Carol (1982) *In a Different Voice*, pp.25-32, 『もうひとつの声で』 pp.99-113、Gilligan (2011) pp.34-35, 39-40, 170, 『抵抗への参加』 pp.42-45, 48-49, 209
- 10 Gilligan (1982) p.35-40, 『もうひとつの声で』 pp.118-127
- 11 Gilligan (2011) p.15, 『抵抗への参加』 p.18
- 12 参照 : Gilligan (1982) pp.62-63, 174, 『もうひとつの声で』 pp.173-174, 392-393、小西真理子 (2024) 「＜人間の倫理としてのケアの倫理＞に対する批判的考察」 (以下、小西 2024) p.9、小西 2018 p.3
- 13 Gilligan (1982) p.105, 174, 『もうひとつの声で』 p.258, pp.392-393、Gilligan (2011) pp.22-23, 42-43, 179-180, 『抵抗への参加』 p.27-29, 52-53, 221, 237、小西 2018 p.9
- 14 Gilligan (1982) pp.64-105, 『もうひとつの声で』 pp.177-259、小西 2018 pp.2-4
- 15 徳倫理学に関する本論の記述は、長友 (2010) 『現代の倫理的問題』 参照。
- 16 ダマシオ 『生存する脳——心と脳と身体と神秘』 pp.215-230、Gilligan (2011) p.33, 42, 51, 62, 『抵抗への参加』 p.41, 52, 62, 76
- 17 cf.小西 2024 p.15-16
- 18 マクダウェル 『徳と理性：マクダウェル倫理学論文集』 p.12
- 19 マクダウェル 『徳と理性：マクダウェル倫理学論文集』 p.3
- 20 マクダウェル 『徳と理性：マクダウェル倫理学論文集』 pp.27-31
- 21 Rorty, Richard (1989) *Contingency, irony, and solidarity*, p.191, 『偶然性・アイロニー・連帯』 p.399
- 22 Rorty (1989) p.192, 『偶然性・アイロニー・連帯』 p.401
- 23 『抵抗への参加』 (訳者あとがき) p.237
- 24 Gilligan (2011) p.99, 『抵抗への参加』 p.121
- 25 cf.小西 2024 p.10
- 26 cf.小西 2024 pp.13-14

- 27 cf.小西 2024 p.9
- 28 Gilligan (2011) pp.39-40, 42, 『抵抗への参加』 p.49, 51, 234, 238
- 29 Gilligan (2011) p.22, 176-177, 『抵抗への参加』 pp.27-28, 216-218, 235-237
- 30 Gilligan (2011) p.24, pp.25-28, pp.107-108, 179-180, 『抵抗への参加』 p.30, pp.31-35, 130-132, 221
- 31 Gilligan (2011) pp.30-31, 『抵抗への参加』 p.38
- 32 Gilligan (2011) pp.23-24, 39-40, 42, 178-180, 『抵抗への参加』 pp.29-30, 49, 51, 221, 237
- 33 Gilligan (2011) p.175, 『抵抗への参加』 p.215
- 34 Gilligan (2011) p.177, 『抵抗への参加』 p.217
- 35 Gilligan (2011) pp.217-218, 『抵抗への参加』 p.218
- 36 『抵抗への参加』(訳者あとがき) pp.239-240
- 37 小西 2024 p.20
- 38 本論文は、2024年5月25日に熊本学園大学で開催された、『抵抗への参加 --- フェミニストのケアの倫理』の合評会での発表をもとに作成した。その際、翻訳者である小西真理子氏、田中壮泰氏、小田切建太郎氏、熊本大学の田中朋弘氏、参加された各機関の皆様から重要な知見を得ることができた。この場を借りて感謝申し上げます。

文献表

- Anscombe, G. E. M. (1958) *Modern Moral Philosophy*, Roger Crisp and Michael Slote ed. *Virtue Ethics*, 1997, Oxford University Press
- Gilligan, Carol (1982) *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press. (川本隆史、山辺恵理子、米典子訳 2022 『もうひとつの声で --- 心理学の理論とケアの倫理』 風行社)
- (2011) *Joining the Resistance*, Polity Press. (小西真理子、田中壮泰、小田切建太郎訳 『抵抗への参加——フェミニストのケアの倫理』 晃洋書房)
- (2023) *In a Human Voice*, Polity Press.
- Rorty, Richard (1989) *Contingency, irony, and solidarity*, Cambridge University Press. (齋

藤純一、山岡龍一、大川正彦訳『偶然性・アイロニー・連帯』岩波書店)

Slote, Michael (1995) *Agent-Based Virtue Ethics*, Roger Crisp and Michael Slote ed.
Virtue Ethics, 1997, Oxford University Press

Stocker, Michael (1976) *Schizophrenia of Modern Ethical Theories*, Roger Crisp and
Michael Slote ed. *Virtue Ethics*, 1997, Oxford University Press

Williams, Bernard (1976) *Persons, Character and Morality*, James Rachels ed., *Ethical
Theory 2 Theories About How We Should Live*, Oxford University Press 1998

—— (1973) *A Critique of Utilitarianism*, J.J.C. Smart and Bernard Williams,
Utilitarianism For and Against, Cambridge U.P., 1973

小西真理子 (2018) 「中絶における女性の倫理的葛藤と責任」待兼山論叢、哲学篇、52 pp.1-18

—— (2024) 「＜人間の倫理としてのケアの倫理＞に対する批判的考察」超域的日本文化研究
15 pp.8-21

セン (Sen, Amartya) 『合理的な愚か者 経済学＝倫理的探求』大庭健・川本隆史訳、勁草
書房、1989年

ダマシオ (Damasio, Antonio R.) 『生存する脳——心と脳と身体の神秘』田中三彦訳、講談社、
2000年

長友敬一『現代の倫理的問題』ナカニシヤ出版、2010年

ヌスbaum (Nussbaum, Martha C.) 『感情と法』河野哲也監訳、慶應義塾大学出版会、2010年

ホフスタッター (Hofstadter, Douglas Richard) 『メタマジック・ゲーム』竹内郁雄・斎藤康己・
片桐恭弘訳、白楊社、1990年

マクダウェル (McDowell, John Henry) 『徳と理性：マクダウェル倫理学論文集』大庭健編・
監訳、勁草書房、2016年

What kind of universality does Gilligan's “ethic of care” have?: Based on the contrast between virtue ethics and Rorty's “solidarity”

Professor, Faculty of Economics, Kumamoto Gakuen University
NAGATOMO, Keiichi

Summary

The “ethics of care” proposed by Carol Gilligan is said to have universality as “human ethics.” This paper examines that claim. It is contrasted with “virtue ethics” in that it places emotions at the basis of ethics. We will also compare this with Richard Rorty's “solidarity” in that it places empathy at its core.

What she wanted to say in the “ethics of care” presented in her masterpieces “In a Different Voice” (1982) and “Joining the Resistance” (2011) is as follows. It seems that there is a division between men and women, and that division is socially created, and in fact there is an “ethic of care” that should be valued for both men and women.

She first presented the following two ethics that corresponded to the differences between men and women.

1, An ethic of justice: An ideal vision in which everyone is treated equally, as if they and others are of equal value, and that things proceed fairly regardless of differences in power.

2, An ethic of care: An ideal image in which everyone is answered by others, accepted, and no one is left behind or hurt.

These two complement and fuse each perspective. In the end, the “ethics

of care” does not differentiate between men and women, but is discussed as a universal “ethics of human beings.”

Virtue ethics, unlike deontology and utilitarianism, questions the idea of establishing “laws” or “coding” morality. It also includes issues of desires, emotions, and individuality, focuses on “good people,” and considers how one can become a “good person.”

It is generally believed that laws have been created based on reason rather than passion. However, in “Emotions and Law,” Nussbaum refers to Aristotle and cites “emotions” as the origin of law. She argues that “emotions include evaluative judgments, and that judgments cannot be made without contradiction unless there are emotions that correspond to evaluative judgments.” In other words, although some emotions are irrational, some emotions are connected to rational “thoughts” and beliefs and are therefore rational. She points to feelings of shame and disgust associated with discrimination, anger at violations of equality and injustice, and sympathy and empathy anchored in evidence. Here, too, the problem discussed in virtue ethics, “the harmony between emotions and desires and reason,” is taken up from a new perspective.

Rorty criticizes the philosophical tradition of accurately depicting nature and deriving truths common to all humankind as “Cartesianism.” Rather, he states that the mission of philosophy is to “continue the conversation” with people who have a variety of ideas, rather than assuming that “oneself is common sense and correct.” Public social justice is not based on the “search for essence” according to conventional philosophy, but on “solidarity” built from “small fragments,” or “sympathy for each individual human being.”

Based on these ideas, Gilligan’s direction can be considered. The “ethics

of care” is not intended to be legalized or codified. It is a question of the way people behave. Like virtue ethics and Rorty’s solidarity.

But Gilligan wants to renew democracy by abolishing patriarchy. Even if we acknowledge this direction, it is pointed out that the very concepts of democracy and justice may be transformed by an ethics of care.